

アンティベラム南部「中間層」再考 —ヨーマンを中心に—

沼岡 努

The 'Middle Class' of the Antebellum South Reconsidered: With a Focus on Yeoman Farmers

Tsutomu NUMAOKA

要旨

本稿の考察の対象は、合衆国南部アンティベラム時代の農村社会におけるいわゆる「中間層」にある。その大半をヨーマンリーが占めたことから、考察の中心はヨーマンとなる。

アメリカ史における「中間層」およびヨーマンリーの定義、歴史的役割に関してはいまだに議論が多い。そこでこの小論では先ず「中間層」の中で数的優位を占めたヨーマンリーの研究史的回顧を試みた。ヨーマンの定義を耕地面積および奴隷数の観点からおさえた後に、実際のヨーマンの生活実態および彼らの経済活動を考察した。

ヨーマンの生活は質素ではあったが困窮をきわめる程ではなく、作物栽培と家畜飼育を基軸とする自給自足的な経済的営みであった。剰余作物が出た際彼らは外界との接触、特にプランターとの取引をおこなった。ヨーマンは作物の生産、収穫物の処理等、様々な点で普段からプランターにある程度依存し、また協力を求めたが、一方プランターも不足しがちな生活食糧を購入することができ、基本的には相互補完・協力関係を形成した。また、ヨーマンの中にはプランテーション経営の中核的役割を果たす奴隷監督に就く者もいた。この意味で南部ヨーマンのプランテーション社会における存在価値は高かったといえる。

だがその反面、「中間層」に属する小売商人、酒場経営者たちの奴隷との非合法的取引はプランターの不安・恐怖の原因となり、地域コミュニティーにかなりの影響を与えた。

キーワード アンティベラム南部、ヨーマンリー、ヨーマン、プランター、奴隷

はじめに

1852年ニューヨーク・タイムズ社と奴隷制南部に関する連載記事掲載の契約を交わしたニューヨーク州出身のジャーナリスト、社会評論家、アメリカ景観建築の祖フレデリック・ロー・オムステッド(Frederick Law Olmsted, 1822-1903年)は、1852年から1857年までの間、計3回延べ14ヶ月を費やし、南部各地を精力的に回った。それらの記事は1853年から『ニューヨーク・デイリー・タイムズ』(*The New York Daily Times*)紙に掲載

され、1857年までに計75本に達した。鋭い洞察力にもとづく南部の人々の赤裸々な日常生活の実態報告により、彼は観察者として一躍名声を博することとなった¹⁾。

オムステッドが南部各地を巡ったのは、「低南部」(Lower South) 諸州 〔南部の中でも低緯度に位置し、綿花・米・さとうきび等の商品作物栽培が盛んだったサウス・カロライナ、ジョージア、フロリダ、アラバマ、アーカンソー、ミシシッピ、ルイジアナ、テキサスの8州をさす〕 一帯に綿作が拡大し、いわゆる「綿花王国」(Cotton Kingdom) が現出し、その後さらに奴隷制経営の拡大・強化によって一段と「土地と奴隷への富の著しい集中化」に拍車がかかり、大プランターがますます富裕になっ

ていく1850年代のことだった²⁾。驚異的な成長を遂げていく奴隷制の光と陰の部分に注意深く観察していったオムステッドの目に映った南部は本質的に三つの階級から成り立っていた。奴隷を所有するプランター支配エリート、貧困で墮落した白人集団、そして隷従を余儀なくされた黒人たちである³⁾。

「プランター—プア・ホワイト—黒人奴隷」という南部社会構造の分類に対しては、南北戦争前夜の当時から批判的な見方が寄せられた。それは、南部白人社会にはプランターとプア・ホワイトの間にいくつもの階層が存在し、それら中間的階層が南部人の圧倒的多数を占めているのだ、というものだった⁴⁾。アンティベラム南部社会に対するこれら二つの見方は20世紀前半における奴隷制研究の高まりとともに、にわかに学問的注目を集めるようになった。以来今日に至るまで研究者間でそれぞれの立場から活発に議論が交わされてきた。しかしながら、その議論は未だ収束の域には達していない。

本稿の考察の対象は、アンティベラム南部農村社会においてプランターといわゆる「プア・ホワイト」と呼ばれた人々の間に位置し、数的優位を占めた「中間層」(middle class)にある。とは言え、その大半はヨーマンリーだったので、自ずと考察の中心はヨーマンとなる。ただし、小売商人も中間層に含まれるので、触れることになる。特に奴隷制との関連で「中間層」を論じる際には小売商人の存在を決して無視することはできない。このヨーマンや小売商人たちが奴隷制最盛期のアンティベラム時代にいかなる経済的、社会的状況に置かれ、どのような歴史的役割を果たしたのか、このことを特に他の階級・階層—つまりプランターおよびプア・ホワイト—との関係に焦点を合わせながら検討すること、これがこの小論の目的である。

本論に入る前に、先ず南部白人ヨーマンの定義・位置づけに関する従来の議論を振り返っておきたい。上述のように、南部社会の性格をめぐる研究者間の議論が続いているからである。

1. 研究史的回顧—ヨーマンリーの階層範囲をめぐって

アンティベラム南部白人社会をプランターとプア・ホワイトの二項対立的構造社会として基本的に理解したオムステッドに対して、彼と同時代の生粋の南部人史家ダニエル・ハンドレー(Daniel R. Hundley)は1860年に『われら南部諸州の社会的関係』(*Social Relations in Our Southern States*)を著し、南部社会を7つの階層に分類した。最下層に位置づけられた黒人奴隷を除けば白人諸階層の両極には大プランターとプア・ホワイトが位置し、その間には4つの階層—具体的には“cotton snob,” “middle classes,” “Southern yankee,” “Southern bully”—が存在しているとした。中でも「農民、プランター、貿易業者、小売商人、職工、機械工、ごく少数の製造業者、多数の田舎教師、半独立的田舎弁護士、医師、牧師」等を含む「中間層が南部人の中で最も大きな割合を占め、かつ南部社会で最も有用な人々である」と主張した。さらに続けて、「南部は第一義的に農業地域なので、中間層の大半は農業従事者なのだ」と説明する。ハンドレーにとって階層区分は単純な資産保有の分類などではなかった。文化的要素—例えば「文化的価値観」(cultural values)や「生活様式」(life style)など—も取り入れなければならないとする彼の基本姿勢がそこには反映されていた。彼の果たした大きな貢献は、大プランター、プア・ホワイト両白人階層間に複数の階層が存在することを指摘した点、さらには中間層が南部社会のきわめて重要な構成要素となっていることを強調した点にあった⁵⁾。

こうした南部中間層の明快な指摘があったにもかかわらず、以後しばらくはこれら二つの立場の間に活発な議論の展開は見られなかった。それが「はじめに」で触れたように20世紀前半期の黒人奴隷制研究の進展とともに大規模プランテーションの経済的、政治的、社会的優位性に歴史家たちが注目するようになり、オムステッドのいわば「三

者集団」⁶⁾ (a triumvirate) 的南部社会構造の解釈が広く受け入れられるようになった。

初期の奴隷制研究に決定的影響を与えた南部生まれのウルリッヒ・フィリップス (Ulrich B. Phillips) を筆頭に、ウィリアム・ドッド (William E. Dodd)、ルイス・グレイ (Lewis C. Gray) などの南部史家により奴隷所有プランターによる旧南部支配体制が理論化され、強調された。例えばフィリップスは奴隷制プランテーションの経済的、政治的、社会的、文化的機能に着目し、プランテーションは商品作物から収益を上げることを唯一の目的とする単なる事業の場ではなく、白人家族を中核とし黒人奴隷をも含めた永続的・自己完結的な生活の場、一種の「家」として位置づけた。特に彼はプランテーションの社会的、文化的役割—その担い手としてのプランターの家父長的役割—を強調する。とはいえ、フィリップス、ドッド、グレイは非奴隷所有農民、小規模奴隷所有者、プア・ホワイトの存在を無視したわけではない。認識しつつも、これらの階層は彼らによればアンティベラム社会ではさほど重要な役割を果たさなかったのである⁷⁾。

アラバマ生まれの南部人ハンドレーが南部社会構造における中間層の存在を主張して以降、彼の解釈はしばらくの間、取る足らないものとして扱われた。だが1934年、南部白人貧困層を調査研究したホランダー (A. N. J. Den Hollander) は『南部の文化』 (*Culture in the South*) 所収の自身の論文の中で「南部社会の三分割図」 (the tripartite tableau of southern society) なる表現を用い、南部社会を「プランター—プア・ホワイト—黒人奴隷」と単純化することに警鐘を鳴らした。ホランダーは、プランターとプア・ホワイトのいずれも南部白人人口の大半を占めるまでには至っておらず、「白人農民一仮に奴隷を所有しているとしてもごくわずかしか所有していないような農民—こそが数的に最も重要な独立自営農民層 (independent yeoman group) を構成していたのだ」と主張した⁸⁾。

アンティベラム南部を少数派プランターによる奴隷支配体制社会 (slaveocracy) として捉える立場に対して、ハンドレーやホランダーと同様中間層に注目し、それまで半ば神話化されるまでに定説となっていたフィリップスに代表される伝統的解釈に果敢に挑戦し、その変更を迫ったのはヴァンダビルト大学 [オウズリーに於ける] のフランク・オウズリー (Frank L. Owsley) 及び「オウズリー学派」と呼ばれる彼の専門の学生や研究者たちだった。オウズリーの南部社会中間層の研究は、ハンドレーが1860年に中間層に属する者として提示した上述の10種以上の職業についてマニユスクリプト・センサスで個々人の職業を調べるといふ気の遠くなるような作業からスタートした⁹⁾。

1940年に中間層農民の位置づけに関する論文を発表したオウズリーは、1949年『旧南部の普通の人々』 (*Plain Folk of the Old South*) を出版し、以前大半の旅行者、研究者から見過ごされてきた「普通の人々」 (plain folk) こそ南部社会の数的多数を占め、裕福なプランターとプア・ホワイトとの間の中間的社会階層を形成し、生活も豊かだったと結論づけた (後述のように、オウズリーは“plain folk”に「普通の人々」では表現しきれない含意をもたせている。従って、以下においては「プレーン・フォーク」と表記する)。

オウズリーのいう中間層とは、その大部分が「土地所有農民と牛飼 (herdsmen)」であり、より詳細には「小規模奴隷所有農民、耕作地を持つ非奴隷所有者、辺境地帯・松林・山岳地帯に暮らさかなりの数の牧夫、そして借地農民」であった。大多数が土地所有農民であり、彼らはプランテーション経済に属していなければ、貧困者やたびたび品位を落とし退廃的なプア・ホワイト階級にも属していない、言ってみれば「富裕でも貧困でもない」人々だった。彼によれば、南部社会において優位に立っていたのはプランター貴族ではなかった。この「プレーン・フォーク」こそアンティベラム南部で重要な役割を果たしたのであった¹⁰⁾。

オウズリーは「中間層」を表す言葉として「プ

レーン・フォーク」なる語を用いた。それは、人として高潔さ、自尊心、自主独立心、勇気、友愛、神への愛などの徳を併せ持っていることを含意していた。だがその社会階層は何らかの明解な経済的指標で明示されることもなければ、またその社会的・文化的特徴が明確に描写説明されるということもなかった¹¹⁾。

このような定義づけの曖昧さに起因する階層間の境界の不明瞭さ—オウズリーは幾つかの経済的・社会的階層をグラフに示すと、小規模農民から大プランターに至るまで「各階層が断絶することなく互いに接続して緩やかな曲線を描く」ことを示唆している¹²⁾—は確かに否めないものの、彼の「中間層」分析の統計的手法—マニュスクリプト・センサスや郡の課税台帳を使った標本抽出法による統計分析—は当時としては注目に値するものであった。そして何よりも彼の提起した「中間層」解釈及び位置づけは、それまで無視ないし軽視されてきた「旧南部」【独立戦争以後南北戦争以前の南部】社会構造研究にある種のダイナミズムを与え、議論を活性化させたことに疑問の余地はない。南部史家ジョン・ボウルズ (John B. Boles) はオウズリーの『旧南部の普通の人々』の新版 (2008年) によせた序文において、本研究書がいまだ旧南部社会研究の「出発点」になっているとしてオウズリーの功績を称えている。それでは以下、オウズリーが「プレーン・フォーク」と呼んだ旧南部中間層の中で大多数を占めた農村部ヨーマンリーの階層範囲を歴史家たちがどのように捉えてきたか、代表的な見解を幾つかを見てみよう。

オウズリー門下のハーバート・ウィーヴァー (Herbert Weaver) はミシシッピ州の農民に関するモノグラフを発表し、U・B・フィリップスのように所有奴隷数のみ重視する階層区分は不正確で問題があるとし、奴隷所有と土地所有の両者を結びつけた階層化を試みた。ウィーヴァーは耕地面積【合衆国センサスでは個人の所有地を“improved land” (耕地) と“unimproved land” (未耕地) に分けて表記している】と所有奴隷の間に10対1の相関性があることに着目し、50人以上の奴隷かつ500エーカー以上の耕地を所有する

者を大プランター、20人以上50人未満の奴隷と200エーカー以上500エーカー未満の耕地を所有する者を中プランターないしは小プランターに分類した。ではヨーマンはというと、ウィーヴァーの言葉を借りれば、「『ヨーマン』 (“yeoman”) もしくは『小農民』 (“small farmer”) は奴隷の所有如何にかかわらず200エーカー未満の耕地を所有する者、及び様々な理由により『プア・ホワイト』 (“poor white”) には分類できない奴隷も土地も所有しない者」であった¹³⁾。

マニュスクリプト・センサスから得られる統計データを駆使し、オウズリー学派よりも正確なヨーマン定義を試みたのがステイヴン・ハーン (Steven Hahn) とレイシー・フォード (Lacy K. Ford, Jr.) だった。この二人は各々ジョージア州、サウス・カロライナ州の西方に丘陵地帯 (Upcountry) となって広がるピードモント台地を対象に調査を行なった。この地域は大プランテーションが発達した大西洋沿岸低地帯に比べて小規模農民が数多く居住する地域だった。

職業別人口で農民が約75パーセントを占めるジョージア州の丘陵地帯を調査研究したハーンは、同地域においてはヨーマンが数的に優勢だったとする。彼はウィーヴァー同様、奴隷と耕地の両要素を考慮しながら階層基準を検討した。ハーンは抽出した丘陵地帯2郡—ジャクソン郡 (Jackson County) とキャロル郡 (Carroll County) —の調査から、白人の圧倒的多数が非奴隷所有者であり、もう一方の奴隷所有者については小規模奴隷所有者の割合が高いことを示した。この結果を踏まえ、彼は奴隷所有者については5人未満の奴隷を所有する農民が典型的だったとする。また、耕地面積に関しては農業センサスや具体的ヨーマンの事例を示し、「200エーカー未満」をヨーマン所有の耕地面積とみなした (表1, 2)。これらの結果から、ハーンが捉えたヨーマンは奴隷5人未満、耕地面積200エーカー未満という数値によって定義されるだろう。ただし、ひとつ補足しておきたい。ハーンは調査した2郡各々の所

表1 ジャクソン郡およびキャロル郡における白人世帯の奴隷所有分布 (1850-1860年)

	ジャクソン郡				キャロル郡			
	世帯主 (%)		土地所有農民 (%)		世帯主 (%)		土地所有農民 (%)	
奴隷数	1850	1860	1850	1860	1850	1860	1850	1860
0	67.5	68.5	48.3	54.4	85.5	82.7	78.4	72.1
1	7.8	5.7	8.8	7.7	3.7	3.5	5.1	5.8
2-4	7.8	10.1	13.2	14.7	3.7	6.9	5.9	10.1
5-9	7.5	8.1	11.2	11.6	3.9	3.9	6.4	6.6
10-14	4.0	3.7	7.8	5.5	1.4	1.8	1.9	3.0
15-19	1.5	1.3	2.9	2.1	0.6	0.5	1.4	0.7
20-29	2.7	1.8	5.3	2.5	0.9	0.5	0.9	1.4
30-39	1.0	0.6	2.0	1.1	0.0	0.2	0.0	0.3
40-49	0.2	0.2	0.5	0.4	0.0	0.0	0.0	0.0
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
世帯数	400	447	205	285	460	433	259	254

出所：Steven Hahn, *The Roots of Southern Populism* (1983), 311.

表2 ジャクソン、キャロル両郡を合わせた農場および耕地面積の分布状況

農場地区分	農場 (%)		耕地 (%)	
	1850	1860	1850	1860
200 エーカー未満 耕地面積	87.8%	93.6%	58.8%	76.4%
200 エーカー以上 耕地面積	12.2%	6.4%	41.2%	23.6%
合計	100%	100%	100%	100%
農場・エーカー数	403 農場	456 農場	36,400 エーカー	32,792 エーカー

出所：Manuscript Census, Georgia, Jackson and Carroll Counties, Schedule II, 1850, 1860; Hahn, *The Roots of Southern Populism*, 28.

有奴隷数について、「10人を超える奴隷の所有者はごく少数だった」、奴隷所有者の「ほぼ80パーセントが10人未満」の奴隷を所有していたとの説明も加えている。従ってハーンが示した「5人未満」の奴隷数は、絶対基準というよりはむしろ許容範囲を多少にじませたものとなっている¹⁴⁾。

ジョージア州の北側に隣接するサウス・カロライナ州丘陵地帯に居住するヨーマンについて調べたフォードが提示したヨーマンの階層条件は若干

きびしいものとなっている。フォードは「丘陵地帯に住む白人農民の大多数がヨーマンだった」点を指摘し、ヨーマンを2グループに分類した。すなわち、「非奴隷所有ヨーマン (奴隷0人)」(non-slaveholding yeomen (0 slaves)) と「奴隷所有ヨーマン (奴隷1~5人)」(slaveholding yeomen (1-5 slaves)) である。このような農民が同地域の農場総数の50パーセント以上を占めて数的優位に立ち、彼らの所有した耕地が「100エーカー未満」だったとする。フォードはこのすぐ上位の農民層を所有奴隷6~19人の「中流奴隷所有者」(middling slaveholders) として位置づけた。この集団をヨーマンに含めないことで、結果としてフォードの描くヨーマン像は、安全第一主義の経営方針の下で綿花市場経済への参入に対してきわめて慎重な態度をとり、その結果、生活食糧生産を何よりも重視する質素な自営農を連想させるものとなっている (表3)¹⁵⁾。

同じサウス・カロライナ州であっても、ヨーマン人口の多い内陸部丘陵地帯とは異なり奴隷を多数所有するプランター富裕層が大々的に商品作物生産を展開した沿岸低地帯 (Low Country) を調査対象に選んだのがステファニー・マッカーリー (Stephanie McCurry) である。大規模奴隷制プランテーションに多くの歴史家が注目し、研究を進める中であってマッカーリーはあえてこの低地帯をヨーマン研究の対象に選んだのだ。その理由は、この沿岸低地帯では「ヨーマン家長と強大な権力を掌握しているプランターとの関係が直接的・即時的であり、日常的な問題や直接交渉が生

表3 奴隷所有規模別にみる農場経営者の農場・耕地・トウモロコシ比率 (%)

	農場経営者の種類				
	非奴隷所有ヨーマン (奴隷0人)	奴隷所有ヨーマン (奴隷1~5人)	中規模奴隷所有者 (奴隷6~19人)	プランター (奴隷20人以上)	借地農
農場	31.1	22.6	23.6	9.6	13.2
奴隷	0	8.6	37.4	53.3	0.8
耕地面積	22.8	17.0	28.7	31.3	—
トウモロコシ	20.8	16.9	31.1	27.7	—
農場総数 = 752					

出所：Manuscript Census of South Carolina, 1850, Abbeville, Anderson, and York Districts, Schedule I, II, and IV; Ford, *Origins of Southern Radicalism*, 59.

起した」からだった。プランター=ヨーマン関係を探究するには格好の場所であると彼女は判断したのである。

さて、ヨーマンの定義に関してマッカーリーは、最良の概念上の定義は彼らが南北戦争後に連邦政府調査官たちの質問に対して「わたしたちは『自身、働く農民 (self-working farmers) なのです』と、次々に答えたこの言葉に象徴的に表れているという。彼女によれば、ヨーマンとプランターを区別する本質的な境界線は「奴隷を所有すること」ではなく、「自身、働く農民なのかどうか」ということであった。耕地面積、農場主家族の人数・年齢・性、さらには奴隷の人数・年齢・性なども考慮しなければならないとした。中でも彼女が特に注意を払ったのは奴隷の単なる人数ではなく、年少・高齢奴隷を除外した実労働奴隷数だった。女性奴隷の日々の労働力、再生産能力なども考慮に入れた。これらの点を総合的に検討した上でマッカーリーはヨーマンを数量的観点から「150エーカー未満の耕地と10人未満の奴隷を所有している」者と定義とした¹⁶⁾。

以上、アンティベラム南部白人中間層の根幹を成していたヨーマンリーの研究史を見てきた。一見個々の歴史家により中間層ヨーマンリーの階層範囲がかなり異なっている印象を抱くかも知れない。だが、彼らは重要な点で共通認識を示している。そのひとつは、指標として耕地面積—土地所有面積ではなく、未耕地面積でもなく、実際耕作を行なっている耕地面積である—及び奴隷数の二つを区分要素として挙げている点である。もうひとつは、ただひとつの数値だけで厳格に線引きをするのではなく、数字では捉えにくい要素も考慮に入れる傾向が見られる点である。

このことに留意しつつヨーマンリーの階層範囲として妥当と考えられる条件を示すと次のとおりである。すなわち、(1)奴隷の所有、非所有は問題ではなく、耕地面積が100~150エーカー未満であること、(2)奴隷を所有している場合には、5人未満であること。ただしこの数は年少・高齢奴隷を

除外した実労働奴隷数とする、(3)耕地労働には奴隷や雇用労働者の有無に関わりなく農場主自身が耕地労働に従事すること、などである。

耕地面積に幅を持たせたのには理由がある。これまで扱ってきた研究者はウィーヴァーを除いていずれもヨーマン、奴隷の一人当たり耕作可能面積については説明していない。仮に奴隷とヨーマンの労働能力、効率性にさほどの違いがなかったとすると、ほとんど全てのヨーマンが栽培していたトウモロコシに関しては、データ上一人当たり20~30エーカーの栽培が可能であった¹⁷⁾。従って、奴隷「5人未満」を耕作可能面積に置き換えれば「100~150エーカー未満」となる。しかしながらこの条件はあくまでも目安であって、絶対条件ではない。実際のヨーマンの農業活動を詳細に検討する際のひとつの目安として理解されたい。

2. ヨーマンの生活実態

1) 合衆国センサスから見たヨーマン

南北戦争直前の1860年センサスによると、合衆国総人口31,443,321人のうち、南部15奴隷州の白人人口8,038,996人、黒人人口4,201,298人（内訳：黒人奴隷3,950,511人、自由黒人250,787人）となっている。このうち奴隷所有者は393,967人、つまり南部白人人口のわずか4.9パーセント—この割合を家族単位に直すと¹⁸⁾、白人家族の約28パーセント—が奴隷所有者だった。裏を返せば、非奴隷所有者が圧倒的多数を占めていたことになる。さらに、約395万人の奴隷が奴隷所有者間にどのように分散していたかを階層別奴隷所有者数で確認すると、10人未満の奴隷を所有する最下層の奴隷所有者が72パーセントと圧倒的に多い。奴隷10~19人の所有者が16パーセント、20人以上の奴隷所有者—一般にプランターと呼ばれていた—が12パーセントと、ごく一部の奴隷所有者が多数の奴隷を集中的に所有していた実態が浮き彫りになる¹⁹⁾。この事実は、多くの奴隷所有者がそれぞれ

ごくわずかな数の奴隷を所有していたことを物語っている。実際、南部史家 J・ボウルズは1860年時点での奴隷所有世帯について、所有奴隷5人未満の世帯が全体の48.5パーセントを占めていたと指摘する²⁰⁾。

以上のことから、南部白人人口の大多数は非奴隷所有者であり、さらに残りの奴隷所有者の内訳をみても、5人未満の奴隷を所有する小規模奴隷所有者が約半数を占めていたことが容易に分かる。先の研究史的回顧から得られたヨーマン農の経営規模とはほぼ重なるのは当然ではあるが、当時の南部白人、黒人各人口データの中に置いてより巨視的に捉えると、当時のヨーマンリーあるいは「中間層」が南部社会階層中に置かれていた位置がより鮮明になってくる。これがアンティベラム南部社会の実像である。ヨーマンリーを南部農村部における白人社会階層の「中間層」として位置づけることはごく自然なことといえよう。

こうした事実を確認して、次にこのようなヨーマンリーに属するいく人かを取り上げ、彼らの日々の生活をじかに見ていくことにする。

2) ヨーマンの生活

伝統的に豚飼養とトウモロコシ栽培がさかんなノース・カロライナ州ではアンティベラム末期の1860年には州内全農場の約7割を100エーカー未満の小規模農場が占めていた。また、奴隷主の7割が10人未満の奴隷所有者だった。このように農村地域の圧倒的多数を占めたヨーマンだったが、1855年8月ノース・カロライナ州の農業誌『農耕者』(*The Arator*)の編集者はピードモント台地ウェイク郡(Wake County)に住むひとりのヨーマンを訪ねた。その時の様子を編集者は次のように伝えている。

「われわれは25日にガリー(Gully)氏を訪ねた…彼のこじんまりとした農場、こぎれいな住居、すくすく育って元気そうな家畜類などは、彼の勤労、きちんとした経営、豊か

さ、充足感を物語る証拠と見て取れて非常にうれしかった…彼はわずか50エーカーの土地を石ころだらけの松林の丘陵地に所有している。そこはもともとやせた土壤の地だったが、今はそのうちの約20エーカーをトウモロコシとえんどう豆の栽培に当てている…ほかには出来の良いサツマイモ畑、まくわ瓜畑、菜園、今後期待できる新しい果樹園など…手押し車や作業道具は小屋のきまった場所にきちんと収納されている。彼は素晴らしい息子、娘を何人か育ててきたが、息子たちはみな成人して家を出てしまっているため、彼自身のほかに畑仕事をする者はいない…ミルクを搾り採れる牛が4,5頭いて、彼の妻と娘がその任に当たり、上等なチーズとバターを産し、かなりの収入源となった。彼は豚の世話に精を出し、市場に出すポークの剰余分もたいていつも確保している。どの働き手(奴隷)も秩序正しく整然とし、心地よい、明るい態度が表われていた。それは、豊かさで満足がそこにあることを物語っていた。」²¹⁾

丘陵地帯に位置する農場で小規模ながら自身の自足的生活をしっかりと維持している様子を読み取れよう。主食のトウモロコシ栽培とタンパク源となる家畜飼育に家族、奴隷と共に従事する、いわゆる典型的なヨーマンの農業生活である。小人数に違いない奴隷たちとの関係も分け隔てのない労働を通じて良好であると判断される。

だが、同じヨーマンでもはるか西方のフロンティア地域テキサスでは少々事情が違っていた。1854年1月半ば、テキサス州東部を旅していたオムステッドはある農夫の家に立ち寄った。その農夫は1,000エーカーもの土地を持っていたが、それは父親が従軍した後に政府から無償で下付されたものだった。オムステッドによると、この農夫は「牛の群れを追い立てる」のが仕事で、それ以外には「やるべきことは何もなかった。」得た収入で彼は時々最寄りの町へ出かけ、食料品やコーヒーを買った。

住居は北部の馬小屋よりも粗末で、「窓はいくつかあったが、板が打ち付けられているもの、木の雨よけが付いているものが一部あり、残りの窓は完全に開け放たれていた。窓にガラス (panes) は全くはまっていなかった。入口のドアはどうかしてやっと閉まった。ベッドに横になると、屋根の隙間から星を見ることができた。」²²⁾

粗末な住居は南部ヨーマンに共通のことで別段驚くほどのことではない。特にテキサスへは東部からの移住者が1830年前後から入植し始めたこともあり、1850年代になってもまだフロンティアの様相を呈していた。河川・陸上交通網は未発達な段階で、農民一家族ごとに小世界を成していたと考えられる。

オムステッドが訪問したこの農夫は奴隷を所有していなかったが、フロンティアの環境は労働量ばかりでなく、食事や主人＝奴隷関係における親密さの点においても両者間に大きな差を生じさせることはなかった。テキサス州のフロンティア地域に組織されたハント郡 (Hunt County) の奴隷制を調査研究したセシル・ハーパー (Cecil Harper, Jr.) は、「フロンティアという状況のゆえに奴隷と主人との関係はテキサス北部においては他の地域よりも緊密だった」し、奴隷の大半は「主人に軽く安堵しながら生活していた」と、フロンティアの環境条件が奴隷制に及ぼした影響について説明している²³⁾。

オムステッドが訪れた農夫に関してもう一点触れておきたい。それは先のノース・カロライナの農夫と農業スタイルが同じという点だ。つまり、トウモロコシ栽培と家畜飼育を主として生計を立てていた。オムステッドは農夫が牛の追い立て以外何もやるべきことがなかったと報告した。だがその少し後で、「われわれの [馬車] 馬に十分与えるくらいの量のトウモロコシはあった」、「農夫の所有する馬たちは冬期間プレーリに放たれていた」と述べている。南部ヨーマンのほとんど全てが自足用作物としてトウモロコシを栽培していたことは当時の南部農業あるいはヨーマンを取り巻

く自然環境からして当然のことだった。このことから、この農夫は家畜飼育に比重を置きながらもトウモロコシ栽培も行なっていたことが分かる。もっとも彼の場合は家畜といっても牧牛である。テキサス州では牛、馬の放牧が主流で、他の南部農村地域、とりわけノース・カロライナ、テネシー、ケンタッキーなどいわゆる「高南部」(the Upper South) に見られた豚飼養中心の家畜飼育状況とは異なる²⁴⁾。こうした地域差はあったが、一般に南部では一テキサスも含めて一昔から「フェンス法」(fence laws) により、フェンスで囲い込まれた耕地の外では誰の所有地であろうとも一般市民の共同財産としてその利用権が保障されていた²⁵⁾。しかもアンティベラム当時は野生豚が森林地帯で木の実、ドングリ等を食べながら生息していたので、捕獲し、切り傷・耳削ぎ落とし・焼印等で自己所有の証を印せば、労力をほとんどかけずに家畜放牧で生計を立てることが可能だった。野生豚とフェンス法、これが南部ヨーマンの間に家畜飼育を普及させた大きな要因だった。

一見のんびりと自足生活を送っていたかのようなヨーマン生活について数値分析を試み、結果、そのような生活に現実性を与えたのがマクドナルドとマクウィニー (Forest McDonald and Grady McWhiney) だった。彼らはアラバマ州の非奴隷所有白人家族4世帯—耕地面積が各々0、1、35、120エーカーのヨーマン4世帯—を抽出調査した。そしてこれら4世帯が豚と牛を主にして家畜を所有していた点を指摘すると共に、4家族中労働年齢に達している23名が作物その他の生産活動に要した労働時間を算出した。その結果、一人当たり換算で「年間わずか約423時間」しか働いていなかったことを析出した²⁶⁾。

さて三人目のヨーマン農の生活事例として、アンティベラム時代には米作大プランテーションが密集していたことで知られるサウス・カロライナ州沿岸低地帯に住んでいた農夫を取り上げてみよう。名前をアブナー・ジン (Abner Ginn) と言ひ、彼はサヴァンナ川沿いのビュフォート地区

(Beaufort District) セイント・ピーターズ教区 (St. Peter's Parish) に住んでいた。オムステッドが訪問した先のヨーマンと違ってジンに関してはセンサス・データ等によりかなり詳しいことが分かっている。ジンの居住地は小高い丘陵地の砂地の土地にあり、そこはプランターが集住する肥沃な土壌を含む湿地帯や沼沢地の広がる低地帯に比べると農業にはあまり適していなかった。近隣地域には同じようなヨーマンが集まっていた。だが、2マイル圏内には富裕なプランターや自由黒人なども居住し、多彩なコミュニティー社会を構成していた。

ジンは妻、9人の子供と一緒に暮らす非奴隷所有ヨーマンだった。彼の農場は562エーカーあったが、その大半が未開墾地で、1850年時点で何とか60エーカーを耕地化し—当時は1エーカーを開墾するのに1ヶ月の人的労働と数頭の雄牛を必要とした—トウモロコシ300ブッシェル、サツマイモ100ブッシェルを生産した。麦類、マメ類は栽培しなかった。またジンは他地域のヨーマン同様、森や沼沢地を自由に利用できる慣習的権利を最大限活用し、豚や牛の群れ—豚75頭、牛25頭—を放し飼いした。ジン家の家庭経済はヨーマン家族の典型であり、何よりも自給自足体制の確立を目標としていた。このことは、トウモロコシやサツマイモを主たる作物とした生産活動に表れている。だがそれらは豊富ではあったが、多種多様とは言い難かった。

1850年代に入るとジンの農場は軌道に乗り、彼は生産を拡大した。耕地はさらに40エーカー広げ、100エーカーになった。小麦やライ麦の栽培も始めた。加えて自家消費用として米作にも着手した。こうして作物の多様化を推し進めたのだった。家畜の所有にもそうした傾向が若干見られ、豚と牛の頭数は減ったが、その代わり馬を増やした。しかし、特に注目したいのは綿花栽培である。1850年に2バールだった綿花生産は、1860年には3バールへと増加した。これは決して多い量ではなかったが、近隣ヨーマンたちも同様に綿作を行

なっていることから、基本的な生活食糧の生産が順調に行なわれ、剰余分を産するようになるにつれてヨーマンたちは貴重な収入源となる商品作物、綿花の栽培を始めたと理解される。このようにジンの農場は時の経過とともに経営が徐々に安定化していき、生産が拡大していった。自給自足的作物生産があくまでも経営の基本方針であり、その目標が達成された段階で小規模ながら商品作物栽培を行なうという堅実な農場運営だった²⁷⁾。

最後のヨーマンの例として、ジョージア州ピードモント丘陵地帯のジャクソン郡 (Jackson County) に暮らしたチャールズ・ブロック (Charles Brock) の生活を見てみよう。彼には1850年時点で二人の息子がいた。労働奴隷は5名で、総勢8名が130エーカーの耕地を耕した。ただし、年によってはしばしば100エーカーよりも少ない面積を耕すこともあった。1850年のデータによると、700ブッシェルの穀物と100ブッシェルのサツマイモ、そして綿花は2バールのみ生産した。これまで見てきたヨーマン同様、家畜飼育もさかんに行なった。豚、羊、牛を多数飼養し、一家に肉、羊毛、ミルク、バター等を供給した²⁸⁾。

以上のヨーマンたちの生活、とりわけ農業生産活動を見ると、耕地面積、奴隷の有無、作物生産高、所有家畜の種類・頭数など個々の数値は異なっている。だが、一階層として数的優位にあったヨーマンリーとしての共通点が浮上してくる。それは、(1)自分が農場の責任者であり、農業生産作業に関わる一切の決定、指揮を下した、(2)農作業には自身を含め、家族構成員、雇用労働者、所有奴隷全ての者が従事した、(3)自足用生活食糧の生産を第一義的なものとした、(4)家畜飼育も生活食糧生産と同等あるいはそれ以上に力を入れた、などの点である。これらは南部どの地域のヨーマンにも当てはまる共通の重要事項であった。

ヨーマン農の生活は質素ではあったが、決して極度に困窮した状態ではなかった。彼らの農業活動の中心はトウモロコシ栽培と放牧様式の家畜飼育であった。作物栽培と家畜飼育、これら二つを

基軸とし、自足的生活を地道に続けていった。こうした安全策をとりながら、他方において広い未開墾地の耕地化も徐々にではあったが着実に進め、剰余作物の出来高を注視しつつ、場合によっては商業的生産にも着手するという二つの事柄を視野に入れた生活、これがヨーマン生活の実態なのである。

3. 外界と接触するヨーマン—経済活動を中心として

前節で見たように、南部ヨーマンの日常は自給自足的農業の営みの世界だった。それは、主穀トウモロコシ栽培と家畜の飼育・放牧を組み合わせたいわば農牧混合の生産活動だったと言えよう。しかし彼らの活動を注視すると、自身の家族を守るための家庭経済という側面のほかに、外の世界へ積極的に出て行き、自らの活動領域を拡大、確立しようとする意図、行動が見えてくる。こうした行動は社会、政治、宗教、文化活動など様々な分野において顕在化したが、今回は経済活動領域に絞って検討してみたい。

このような視角から上述したヨーマンの日々の農業活動を再確認すると、例えばノース・カロライナのガリ氏においてはバター、チーズが「かなりの収入源となった」のであり、また「市場に出すポークの剰余分」を「いつも確保して」いた。テキサスのフロンティア農民は「牛の群れを追い立てる」仕事から「収入」を得ていた。サウス・カロライナ米作低地帯に住んでいたジン氏の場合には作物生産の拡大化を進める中で換金作物の綿花栽培に力を入れていった。ジョージアのブロック氏は奴隷5名を使役して穀物のほかに「綿花2バール」を生産した。この綿花が換金されたかどうかは定かでないが、ほかのヨーマンに比べて経営規模が大きいことから、出荷して収益を得た可能性は高い。

生産作物ないしは飼育した家畜をヨーマンが市

場化する場合、その多くは近隣プランテーションあるいは最寄りの町が取引市場となった。アンティベラム当時プランテーションは経営の拡大化・合理化により綿花・米・さとうきび等ステーブル・クロップスの生産に傾斜した経営を推進していたため、生活食糧作物の自給率はヨーマンほどではなかった。それゆえ、自給自足的ヨーマンにとってプランテーションは剰余作物取引の格好の場となった。またヨーマンの一部の者たちはプランテーション奴隷たちとも「陰」の世界で—いわゆる「奴隷経済」(the slave's economy) 活動の領域で—取引していた。もう一方の家畜については、ヨーマンは近隣地域の村・町などの市場へと追い立ててゆき、家畜商—彼らも階層的にはヨーマンであった—に売却することが多かった。このようにアンティベラム南部ヨーマンの外界との接触は、プランター、奴隷、そして家畜商が主たる商取引相手となった。

1) ヨーマンとプランターの接触

ウェールズ生まれのチャールズ・ウィットモア(Charles Whitmore) は1828年にミシシッピ州ナッチェズ〔ミシシッピ川に面する河港。南北戦争以前には綿花の積出し港として栄えた〕近郊に「モンペリア・プランテーション」(Montpelier Plantation) として知られるプランテーションを創設した。所有地300エーカー、奴隷数20人(1834年時点)と比較的小規模な綿花プランテーションだったが、ウィットモアは進歩的科学農法の実践者で、創設時から綿繰り機(cotton gin)や綿花圧縮機(cotton press)、また麦藁裁断機などを所有した。近隣農民たちは収穫した自分の綿花をモンペリアまで運搬し、手数料はかかったがウィットモアの綿繰り機を使って綿繊維と種子の選別という手間のかかる作業を効率的に行なうことができた。このような綿繰り機やトウモロコシ製粉機の賃貸し制はアンティベラム以前からプランターが地域の農民に広く行なってきた一種生活共同体的慣習であった²⁹⁾。

ウィットモアはまた家畜の飼育にも力を入れた。

牛、豚、家禽類をイギリスから輸入したが、特に彼の豚は優れた品種で需要も多く、遠方のニューオーリンズ市場でも売却された。地元農民たちは彼の豚を繁殖目的で時々借り受けたりした。さらにある時、農民たち数名はウィットモアの性能の良い便利な麦藁裁断機に惹かれ、彼に委託手数料を払って同じ裁断機をイギリスに発注してもらった。このようにヨーマンによる農場経営は、同一地域内で高価で新しい機械・農機具を所有するプランターに対してある程度依存・協力を求めるという一側面を有していた。これは言うまでもなく両者間の信頼関係を土台として構築されるものであった³⁰⁾。

ヨーマン=プランター関係は、時にはヨーマンによるプランテーション奴隷の賃借という、奴隷を介した間接的関係をとることもあった。このことが後述する非公式の「奴隷経済活動」(slaves' economic activities) —すなわち奴隷主導の「内部経済」(internal economy) —の呼び水となる。前節で挙げたサウス・カロライナ州沿岸低地帯に居住する農夫アブナー・ジンは奴隷を所有しない代わりに隣接プランテーションから男性奴隷を土曜の夜や日曜に賃借りし—これは週末にプランテーション労働が休みとなるのを利用した奴隷雇用であった—屋根板用材木切り、フェンス用柵木割り、フェンス支柱の穴掘りなどの大工仕事や土木仕事をはじめ、その他必要な仕事を何でもやらせた³¹⁾。

ヨーマンが労働者を一時雇用する場合とは逆に、自身が例えばプランターに雇用されるというケースもあった。この場合、ヨーマンの中でも比較的貧困なヨーマンが労働者となって近くのプランテーションに働きに出た。一例として、ノース・カロライナ州東部フェルプス湖(Lake Phelps)畔の低湿地帯にトウモロコシの商業的生産を大々的に展開した「サマーセット・プレイス・プランテーション」(Somerset Place Plantation) 〔奴隷300人前後、トウモロコシ年間生産量3万ブッシュェルの大プランテーション〕には貧しい近隣ヨーマンたちが労働するために時々集まった。サマーセットの元奴隷

ユライア・ベネット(Uriah Bennett)は1860年当時まだ8歳だったが、後年この当時のことを振り返っている。「自活できるほどの土地を持たない白人貧農たちはコリンズ〔サマーセット・プレイスの奴隷主、ジョサイア・コリンズ3世のこと〕の所へやって来て彼のために働いた。そして小麦粉その他自分の必要な品々をかわりに手に入れるのだった。彼らは自分の労働で払えない差額分の支払いに鶏や卵を売った。」³²⁾ また、ジョサイア・コリンズ3世(Joshiah Colins III)はこうした貧農たちと材木伐採およびその製材の契約を結び、彼らに土地も賃貸した。プランテーション周辺は森林が豊かだったので、隣接するペティグルー・プランテーションも同様の事業を行ない、年に100人もの小農を雇用した³³⁾。

農業機械・機具・奴隷の賃借・ヨーマン自身の雇用労働以上にヨーマンとプランター両者の関係をつなぎ止めたのが生産物取引だった。ヨーマンたちはプランター居住地域から離れた遠方の隔離された地域に住んでいた訳では決してなかった。プランテーションに隣接する形でヨーマンたちの農場が立地していた。従って、食糧作物自給率の高かったヨーマンが剰余作物をプランターに売却するのはある意味で自然な取引行為だった。アンティベラム南部農業史家サム・ヒリアード(Sam B. Hilliard)は、食糧作物の売買は何も綿花地帯のプランターとその隣接農民との間だけのことでなかった—従来、綿花地帯のプランターは奴隷配給食糧を他地域から輸入していたとされていた—と主張した。商取引は「互いに隣接しているプランター、農民間で〔個別的に〕行なわれていた」のであり、南部農村地域に広範囲に見られた³⁴⁾。

実際、プランターたちが残したプランテーション記録には彼らが近隣農民からトウモロコシ、豚、家禽類、さらに卵、バターなど、生活食糧作物から家畜・家禽およびその加工品に至る様々な品を購入した証拠が記されている。これらは丁度プランターが所有奴隷および隣接地域の奴隷たちから購入したものとほぼ同一である。一方、近隣在住の農民たちはプランターから調理用・暖房用の燃

材料、すなわち薪を購入した。これはアンティベラム時代以前から農村部に見られたプランター＝農民間の日常生活レベルの伝統的慣習だった³⁵⁾。こうした両者の関係は、農村部の地域コミュニティがプランターを中心としてヨーマン、奴隷—自他プランター所属の一—を包摂した一種経済共同体を形成していたことを物語っている。

これまでヨーマンとその上位階層であるプランターとの経済的つながりについて2,3の側面に注目して考察してきた。だが、南部経済に大きな影響力を持っていたプランテーション機構に最も深く入り込み、プランターに大きな影響力を行使できたのは「奴隷監督」(overseers)の地位に就いたヨーマンだった。

奴隷監督の出自に関して南部史の先駆的研究者—U・B・フィリップス、L・グレイ、ジョン・バセット(John S. Bassett)など—はプア・ホワイトが金銭目当てでその任に就き、残忍・冷酷な監督と化した、というイメージをつくり上げた³⁶⁾。だが実際には、彼らはプランテーションの所在地域、また生産ステープル・クロップスの種類により多少異なるが、大半は「南部社会のヨーマン出身者」であった。特に農業技術の知識を持つ準専門家がプランターと年契約を交わし、プランテーションの実質的経営者となった³⁷⁾。奴隷監督が無知・無学であるとか、教養がないといった議論は当たらない。彼らは頻繁にプランターと書簡を交わしたが、それを見れば多少の綴りの間違い、不適切な表現はあるものの、プランターと作物の出来不出来、収穫作物の出荷時期の検討、奴隷の労働管理等、生起する様々な問題について共に真剣に一時々は意見対立から険悪な関係に変わることもあったが一検討していた事実が明らかになる。

サウス・カロライナ州の米作および綿作大プランター、ジョン・グリムボール(John B. Grimball)が1832年～1864年の間に記した日記には奴隷監督に対する感想や評価が出てくる。例えば、1855年11月28日の欄には奴隷監督ジョーダンに対して、「ジョーダンは仕事をとてもよくやってくれるの

で満足している。機知に富んでいるし、わたしの前での態度には敬意が感じられる。作物の出来もいい」と、かなり褒めている。だが、グリムボールが優しい、温情主義的なプランターだったかと言えば、そうではない。日記には頻繁に奴隷監督との年契約に関して毅然とした態度をとったことが記されている。1834年11月、奴隷監督ノースがマラリアが発生する季節には気候の良い松林丘陵地に滞在できなければ翌年の契約には応じられないと申し出てきた時、グリムボールはきっぱりとその要求をはねつけたのである。

ノース・カロライナ州東部でトウモロコシの商業的生産を展開していたエベネツァー・ペティグラー(Ebenezer Pettigrew)が残した史料には雇用した奴隷監督が意に沿わず次々と解雇した事実が記されている。しかしその反面、有能な監督には賛美を惜しまなかった。1831年から監督を務めたダベンポート(Doctrine W. Davenport)は労力を惜しまないエネルギッシュな男で、監督日誌も詳細に綴った。ダベンポートに対するペティグラー家の信頼は篤く、彼らはダベンポートを「親戚か無二の親友」であるかのように扱った。ある時エベネツァーは友人に宛てて「わたしには今とても素晴らしい監督がいる」と書いた³⁸⁾。

しかし、ある時ペティグラーが特定の一群の奴



1日の労働後、綿花収穫量を測定する奴隷監督

隷たちに特権を与えた時、ダベンポートは頑としてペティグラーの策を認めず、意見は激しく対立した。奴隷監督は実質プランテーションの管理監督の責任者であったので、ダベンポートによらず

いかに有能な監督であろうとこうした対立を避けて通ることはできなかった。だが、われわれはこうした有能なヨーマンたちがプランテーション経営に深く関わり、プランターに盲目的に従っていた訳ではなかったという事実を目を向けなければならない。畢竟、奴隷監督の側にもプランター家族の側にもカースト的感情などは存在しなかったのである。

2) 「中間層」 貧困商人と奴隷の接触

「はじめに」でも触れたように、ヨーマンが数的に南部白人社会「中間層」の大半を占めたが、「中間層」を奴隷制との関わりにおいて論じる場合、貧困白人商人の存在、役割を無視することはできない。比較的貧しかった非奴隷所有白人小商人が奴隷と接触するようになったのは、もとをただせばプランターによる対奴隷労働戦略に求められる。従って、少々冗長な論理展開となるかも知れないが、プランターの労働戦略について先に述べておきたい。

アンティベラム時代の奴隷主、とりわけプランター階級は利潤極大化指向の下、経営の合理化、効率化を推し進めていった。彼らは、奴隷の労働管理・統制においては強制や懲罰よりもむしろ労働意欲を引き出すことの方がはるかに重要であるとの認識を示し、その具体的方策として「奴隷耕作地」(以下「耕作地」) — 一般に奴隷主が「奴隷菜園」(slave garden)、「ニグロ耕作地」(negro patch)等の呼称で奴隷にその用益権を認めた土地のこと—を考案、実践していった³⁹⁾。「耕作地」の歴史は古く植民地時代から存在したが、それは主に奴隷主が配給食料の一部経費節約のために導入したものだ。それが後にプランターの飽くなき利潤追求欲と結び付き、ごく一般に見られる「菜園」(gardens)に近い家族「耕作地」の形態にとどまらず、個人「耕作地」や集団/共同「耕作地」といった形態を生み出し、さらにこれらを組み合わせたりもし、奴隷の労働意欲を高めるべく試行錯誤を重ねた⁴⁰⁾。当時南部に出回った奴隷

主向け農業誌・経済誌をとおしてプランター同士が「耕作地」の効果、利点等について実践報告も含めて情報交換していたことは周知の事実である⁴¹⁾。

こうしたプランターの対奴隷労働戦略が果たして効果を上げたかどうかは、労働から解放される週末の安息日に自身の生産物を携帯し、「日曜日」(Sunday market)へと向かう活気溢れる大勢の奴隷たちの光景が何よりも如実に物語っている。北部人ジョゼフ・イングラハム (Joseph Ingraham) は目撃した光景について次のように記している。

「彼ら〔奴隷たち〕は安息日を休日として与えられており、この日彼らはプランテーションを離れ、町へ行って自分の産物を売り、ちょっとした贅沢品や必需品を買うことを許されている。町へと通じる何本もの大通りが当日はおしゃべりをしたり、笑ったりしているニグロたちの群集であふれかえるのだ。ニグロはみな盛装し、品物をいっぱい詰め込んだ籠を巧みにバランスを取りながら頭にのせている。」⁴²⁾

利潤指向型の企業家的・資本主義的精神を内面化したプランターの多くは、このように最寄りの町での生産物取引を許した。だが、中には奴隷が外出することを禁じ、プランテーション内に「プランテーション・ストア」を設置するプランターもいた。自由世界との接触を警戒したからである。一例として、ノース・カロライナ州のプランター、エベネツァー・ペティグラーの残したプランテーション帳簿には彼が「プランテーション・ストア」で奴隷たちと取引した様々な品目と金額が記載されている。

奴隷が売却した多くはトウモロコシだったが、例えば1818年、1820年、1822年、1826年の各年にエベネツァーは大人奴隷一人ひとりに一律4.71、4.00、6.60、4.20ドルを支払った。これは、エベネ

ツァーが集団/共同「耕作地」活動を奴隷に許可し、自らその管理・運営に関与していたことの証左である。一方、1819年には12名の奴隷それぞれが0.8ドルから5.00ドルの範囲で異なった額を受け取っている。1821年には14名が2.62ドルから9.10ドルの範囲の額を、1824年、1825年には各々16名が1.80～3.45ドル、2.00～10.00ドルの額を受領している。これは個人「耕作地」からの生産物取引と解される。このようにエベネツァーは二種類の「耕作地」を組み合わせて運営することで、個々の奴隷から労働に対する自主性や意欲を引き出す一方、畑奴隷全体の労働生産性の向上も達成しようと心を砕いたのであった⁴³⁾。

「プランテーション・ストア」が奴隷の自律的「耕作地」活動を経済統制する上で効果的だったかといえ、疑問の余地が残る。当時の南部農業誌のひとつ『南部農場経営者』(*Southern Agriculturist*)誌にはある奴隷監督から「ニグロは主人との取引以外にはどうあっても取引を許されるべきではない」との手紙が寄せられたが、これは裏を返せば奴隷たちが主人以外の者と外部で取引している実態を讀者であるプランターたちに報告しているようなものである⁴⁴⁾。

南部人史家ハンドレーは、南部には宗教に背を向け安息日を守らずに「奴隷との闇取引」をさかんに行なう「三流酒場経営者」(groggery-keepers) —彼らはたいてい非奴隷所有白人だった—がいたと指摘する。実際、こうした酒場経営者の中には接触した奴隷たちにプランテーション所有物の窃盗をけしかけ、大金を稼ぐ者もいた。酒場経営者と奴隷たちとの間には社会的犠牲者、落ちこぼれ同士の種のある種の「共感」、連帯意識が醸成される危険性があった⁴⁵⁾。

奴隷との同様の意識ないし関係は小規模ヨーマンとの間においても形成された。土地評価額500ドルの農場を運営していたミシシッピ州のある小農は「地元の黒人たち何人かと取引をしたり、酒を飲んだり、ギャンブルをしたりした。」一般に、プランターよりも所有奴隷の少ないヨーマンたち

は奴隷と共に耕地労働をし、汗を流した。同じ教会にも出席した。こうした日常生活の一コマとして奴隷あるいは近くに住む自由黒人との間で取引や酒を交わす機会があったとしても何ら不思議ではない。またごく普通の非奴隷所有白人の中にも隣接するプランテーションの奴隷たちにプランターをはじめ他人の物品を窃取させ、それと交換に奴隷の好きな酒を与える者たちもいた。こうした奴隷制社会における人種、階級を超えたイデオロギー構造破壊の危険性を敏感に感じ取っていたのか、サウス・カロライナ州のある米作プランターは訪問者オムステッドに対して、奴隷が近隣の「三流酒場」(grog-shops)で店主と生産物取引を行なうことを絶対に認めていないと明言した⁴⁶⁾。

しかしながら、現実には禁止されていたにもかかわらず夜間こっそりプランテーションを抜け出し、外で取引をする奴隷が後を絶たなかった。奴隷制南部社会構造に適応できなかった、ないしははじき出され、社会的成功とはかけ離れた自分だけの小世界に暮らしていた非奴隷所有白人たちの中には、このように奴隷制社会やプランター個人が定めた規則を破って地元のコミュニティーに出てきた奴隷たちと接触し、非合法的取引を行なう者たちがいたのであった⁴⁷⁾。

4. 結びにかえて

アンティベラム末期に示された「中間層」見解を七十数年の歳月を経て再び歴史家たちの活発な議論の場に押し出したのはフランク・オウズリーだった。彼は「プレーン・フォーク」の説明の中で次のように述べた。すなわち、このような人々の大半は農業に従事し、「その数は数百万人にのぼった。彼らはプランテーション経済の構成部分にはならなかった」と⁴⁸⁾。しかしながら、以上の考察が示すように、中間層の多数派を占めたヨーマンはプランテーション経済の中核的部分で、またその周縁部でもかなり大きな影響力をもっていた。

プランテーション労働の指揮・監督の任に当

たった奴隷監督の大多数は南部出身のヨーマンだった。彼らはプランターの代理として実質的に農園運営をかなりの程度任されていた。一方、プランテーションの中核的労働勢力を構成していた黒人奴隷と非公式な取引—それは奴隷主も半ば認めざるを得ない必要悪的側面を有していた—を行っていたのは、近くの四つ辻にある小店や飲み屋の経営者あるいは近隣在住の小農だった。中間層の中では下層の部類に属する者たちである。

プランテーション経済・社会の中心部で重要な役割を果たしていた奴隷監督の中には小農たちが労働閑期に入ると彼らに雇用先を見つけてやる者もいた⁴⁹⁾。こうしたヨーマン間での相互扶助・協力体制がどの程度浸透していたかは今後の課題であるが、これまでの考察から中間層の大半を占めたヨーマンがプランテーション経済の中核においても、また周縁部においても様々な形でプランテーション経済・社会と関わりを持ち、かなりの程度プランターと信頼・協力関係を構築すると同時に、他方プランターに不安・恐怖を及ぼすような存在にもなり得たことが明らかになった。

最後に、本論からは時代的に逸脱するが、この小論で扱った時代以前、特に19世紀初頭から1820年頃までのヨーマンとプランターの関係はどうだったのだろうか。きわめて断片的ではあるが、補論として以下若干述べてみたい。

ヨーマンとプランターの経済的結びつきは必ずしも常に相互依存関係が平和裏に形成・維持されていった訳ではなかった。例えば19世紀初期の出港停止令（1807年）〔アメリカの軍艦がイギリス艦に砲撃された事件をきっかけに、ジェファソン大統領がアメリカの港に停泊する全商船の出港を禁じたもの〕から米英戦争（1812-1814年）〔ナポレオン戦争中のアメリカとイギリスの戦争。ナポレオン戦争中アメリカは中立的立場を表明したが、イギリスの海上封鎖によりアメリカ商船が通商妨害、臨検・拿捕の被害に遭い、両国間で戦争が勃発した〕にかけての時期、大西洋沿岸のチェサピーク湾地域に見られたプランターに対する小規模ヨーマンや小農のタバコ生産・売却取引上の相対的劣勢状況は、プランター側の貪欲な利潤追求志向と小規模ヨーマン、小農たちの窮乏生活からくる「現金に対する必要性」という両者の意図・企ての結果、プランターには時には「400パーセントを超える

純益」を、ヨーマン及び小農たちには「最低価格での売却」をもたらした⁵⁰⁾。

次の手紙はこうしたプランターと近隣小規模ヨーマンとの経済的取引関係をプランター側の目線で捉えたものである。メリーランド州タバコ・プランターの女主人ロザリ・カルバート（Rosalie Calvert）は1808年、父親に宛ててタバコ投機が生み出す大きな利潤について書いた。

もしも予期せぬことが何も起こらなければ、わたしたちのタバコの出来は素晴らしいものになるでしょう。でもすぐに売ろうとは思っておりません。今、危険を冒さずに簡単に大きく儲ける方法はタバコを購入することなのです。3,4ドルで買えます。現金でなら100〔ホグスヘッド〕〔1ホグスヘッドは1,500ポンド〕 当たりわずか2.50ドルで買えるのです。マードック〔カルバート家のヨーロッパ代理商〕 に送ったわたしたちの最後のタバコは、経費その他一切を支払った後100〔ホグスヘッド〕当たり平均12ドルの純益をもたらしました。〔近年〕タバコを小農たちからシーズン初めに買い、投機をして失敗するようなことはありません。

出港停止令が引き起こす弊害があるなんて信じられません。つい先日、近くのプランテーションがかつての評価額の十分の一で借金返済のために売られました⁵¹⁾。

ここに引用したのは手紙の後半部分である。最後にほんの付け足しのように土地売却について一言ふれている。これはプランテーション売却の情報だが、上述のようにヨーマンや小農たちの生活苦はこの時代—出入港禁止、貿易断絶から1812年戦争終結に至る時代—かなりなもので、比較的裕福なプランターたちはこれを機に自分の土地を拡大しようとこれら農民の土地買収に乗り出した。カルバート家の隣人、未亡人マーガレット・アダムズ（Margaret Adams）は102エーカーの土地と20人の奴隷を所有する小規模ヨーマンだったが

—1807年までに彼女はこれら奴隷を全て売却ないしは個人的に解放した—カルバート家からの執拗な土地買収話に屈しなかった。アダムズ土地がカルバートの所有地となったのは、彼女の死後1814年のことだった。多くの小規模ヨーマンや小農にとっては経済的に生きのびていくことは「闘争」(a struggle)に他ならなかった⁵²⁾。

この時代、ヴァージニア、メリーランド両州のタバコ経済は対イギリス外交の関係で苦境に立たされていた。そうした状況下でヨーマンはプランターの利潤追求欲の犠牲となり、生産した綿花、さらには農場までも場合によっては手放さざるを得なかったのである。

注

- 1) オムステッドの記事は*The New York Daily Times*のほか、わずかな回数だったが*The New York Daily Tribune*にも掲載された。これらの記事は南北戦争(1861-1865年)をはさんで4冊の著書として出版された。すなわち、Frederick Law Olmsted, *A Journey in the Seaboard Slave States* (New York, 1856); *A Journey Through Texas* (New York, 1857); *A Journey in the Back Country* (New York, 1860); *The Cotton Kingdom* (New York, 1861)である。オムステッドの南部旅行、また奴隷制との関わり合いについては、Charles C. McLaughlin and Charles E. Beveridge, eds., *The Papers of Frederick Law Olmsted*, vol. 2 (Baltimore, 1981), 1-39; Robert W. Fogel and Stanley L. Engerman, *Time on the Cross: The Economics of American Negro Slavery* (2 vols: Boston, 1974), vol. 1, 170-181. 田口芳弘・榎原胖夫訳『苦難の時—アメリカ・ニグロ奴隷制の経済学』(創文社, 1978), 128-137.
- 2) Stephanie McCurry, *Masters of Small Worlds: Yeoman Households, Gender Relations, and the Political Culture of the Antebellum South Carolina Low Country* (New York, 1995), 71. アンティベラム時代の大プランテーションへの土地および奴隷の集中化現象は定説となっている。Michael Mullin, ed., *American Negro Slavery: A Documentary History* (New York, 1976), 133も参照。
- 3) Fogel and Engerman, *Time on the Cross*, 171; Randolph B. Campbell, "Planters and Plain Folks: The Social Structure of the Antebellum South," in John B. Boles and Evelyn Thomas Nolen, eds., *Interpreting Southern History* (1987), 48. オムステッドにとっては、いくら小土地あるいは奴隷を所有しようとも明らかにエリートでない原始的容貌の白人は「プア・ホワイト」(poor whites)でしかなかった(プア・ホワイトに関しては次の注4を参照)。例えば、サウス・カロライナ州のある米作低地帯の田舎の教会で彼はホームズパンを着たおよそ50人の白人たちと出会い、彼らをあっさり「クラッカー」("crackers")と決めつけてしまった。だが彼は「その内の一部の者たちはニグロを多数所有し、外見ほどには決して貧困ではない」と人から聞いて自

身の誤認に気付いたのであった。Olmsted, *Journey in the Seaboard Slave States*, 454.

- 4) Daniel R. Hundley, *Social Relations in Our Southern States* (Baton Rouge, 1979, c1860), 77-128. 特に80-81頁。プア・ホワイトは南部白人社会階層の底辺に位置づけられ、墮落、怠惰、無精の代名詞と見なされる特異な存在だった。単に経済的に貧困状態にあったというだけでなく、文化的、モラル的にも文明社会に適応できず、周囲の人々から落ちこぼれてしまった者たちだった。白人側からは「クラッカー」(cracker)、「ヒルビリー」(hill-billies)、「サンド・ヒラー」(sandhillier)、「レッド・ネック」(red neck)などと呼ばれ、一方黒人たちからも「プア・ホワイト・トラッシュ」(poor white trash)、「プア・バックラ」(poor buckra)などと呼ばれ軽蔑された。概ね南部人口の1割以下を占めていた。プア・ホワイトの歴史的な位置づけに関して見解は様々である。例えば、「プランター—ヨーマン—奴隷」という南部経済体制の外に追いやられた非生産階層としてみる見方や、極貧という経済的状態に加えて独特な文化的特徴も兼ね備えている存在として解釈したり、またヨーマンと区別しつつもそのヨーマンとひとまとめにしてプア・ホワイトと位置づける立場など、歴史家の視角、捉え方は様々ではない。Mildred R. Mell, "Poor Whites of the South," *Social Forces*, 17 (1938), 157-160; J. Wayne Flint, *Dixie's Forgotten People: The South's Poor Whites* (Bloomington, 1979), 1-10; Avery O. Craven, "Poor Whites and Negroes in the Ante-bellum South," *Journal of Negro History*, 15 (1930), 15; Steven Hahn, *The Roots of Southern Populism* (Oxford, 1983), 15-133; Hollander, "The Tradition of 'Poor Whites'," 403-431; Guion Griffis Johnson, *Ante-Bellum North Carolina: A Social History* (Chapel Hill, 1937), 67-73.
- 5) *Ibid.*, pp. 367. ハンドレーが示した南部社会の7階層とは "Southern gentleman," "cotton snob," "middle classes," "Southern yankee," "Southern bully," "poor white trash," "Negro slaves" であった。Tommy W. Rogers, "D. R. Hundley: A Multi-Class Thesis of Social Stratification in the Antebellum South," *Mississippi Quarterly*, 23 (1970), 135-141も参照。
- 6) 南北戦争以前の南部社会を構成した主たる集団としてトミー・ロジャーズ (Tommy W. Rogers) は「土地所有貴族、プア・ホワイト、ニグロ」を挙げ、「三者集団」(a triumvirate)と表現した。わずかな数の奴隷を所有し、綿花以外の種々の作物を栽培していた圧倒的多数の小農 (small farmers) を無視する捉え方に対していくぶん皮肉をこめて表現したものと解せられよう。Rogers, "D. R. Hundley: A Multi-Class Thesis," 135.
- 7) Ulrich B. Phillips, "The Origin and Growth of the Southern Black Belts," *American Historical Review*, 11 (1906), 798-816; *American Negro Slavery: A Survey of the Supply, Employment and Control of Negro Labor as Determined by the Plantation Regime* (Baton Rouge, 1969, c 1918), 196, 401; William E. Dodd, *The Cotton Kingdom: A Chronicle of the Old South* (New Haven, 1920), 24-47; Lewis C. Gray, *History of Agriculture in the Southern United States to 1860* (2 vols., Washington D.C., 1933), vol. 1, 444-445, 474, 532-537.
- 8) A. N. J. Den Hollander, "The Tradition of 'Poor Whites,'" in William T. Couch, ed., *Culture in the South* (Chapel Hill, 1934), 417, 403.
- 9) Frank L. Owsley and Harriet C. Owsley, "The Economic Basis of Society in the Late Ante-Bellum South," *Journal of Southern History*, 6 (1940), 24-45.
- 10) Frank Lawrence Owsley, *Plain Folk of the Old South*

- (Baton Rouge, 1949), vii-viii, 7-8.
- 11) *Ibid.*, vii; Samuel C. Hyde, Jr., "Plain Folk Reconsidered: Historiographical Ambiguity in Search of Definition," *Journal of Southern History*, 71 (2005), 806.ハイドは "plain folk" という表現について、このような人々が南部に遍在していたこと、また彼ら自身が己を理解・認識していたこと、この両方を象徴している言葉だとする。それにしても、オウズリー自身は南部社会構造の3階層の呼称を "p" でそろえるように、つまり "planter," "poor whites" に合わせて "plain folk" なる語句を案出したのだろうか。
 - 12) Frank L. and Harriet C. Owsley, "The Economic Basis of Society," 42.
 - 13) Herbert Weaver, *Mississippi Farmers 1850-1860* (Gloucester, Mass., 1968, c1945), 37-38, 56.
 - 14) Hahn, *The Roots of Southern Populism*, 20-28.
 - 15) Lacy K. Ford, Jr., *Origins of Southern Radicalism: The South Carolina Upcountry, 1800-1860* (New York, 1988), 44-95.特に59, 70-78.
 - 16) McCurry, *Masters of Small Worlds*, 47-51.
 - 17) R. Douglas Hurt, *Agriculture and Slavery in MISSOURI'S LITTLE DIXIE* (Columbia, 1992), 215-216; Wayne Rasmussen ed., *Agriculture in the United States: A Documentary History* (1975), vol. 1, 863; William L. Barney, *The Passage of the Republic: An Interdisciplinary History of Nineteenth-Century America* (Lexington, 1987), 29-30; *Southern Agriculturist* 5 (1832), 181-184.
 - 18) 奴隷所有者数を奴隷主家族単位に直す際に問題になるのは、当時の南部一家族当たり平均家族構成員数である。この点に関しては過去歴史家の間でも意見の相違が見られたが、ここでは5.7人と計算している。様々な見解については次に詳しい。本田創造『アメリカ南部奴隷制社会の経済構造』(岩波書店, 1964年), 142-143, 147-151.
 - 19) U.S. Bureau of the Census, *The Eighth Census of the United States, Agriculture, 1860*, (1864), 247-248; U.S. Bureau of the Census, *Statistical View of the United States, a Compendium of the Seventh Census, 1850* (1854), 94-95. ちなみに奴隷50人以上を所有したいいわゆる大プランターは奴隷所有者中わずかに2.8パーセントだった。
 - 20) John B. Boles, *Black Southerners 1619-1869* (Lexington, 1984), 76.
 - 21) Johnson, *Ante-Bellum North Carolina*, 66.
 - 22) Olmsted, *The Cotton Kingdom*, 304.
 - 23) Cecil Harper, Jr., "Slavery without Cotton: Hunt County Texas, 1846-1864," *Southwestern Historical Quarterly*, 88 (1985), 398, 399.
 - 24) 拙論「豚、奴隷、家畜商がつくり出したもうひとつの世界—アンティベラム南部社会再考—」『新潟産業大学経済学部紀要』48 (2017年), 51-55頁。
 - 25) 同上 47-51頁。
 - 26) Forrest McDonald and Grady McWhiney, "The South from Self-Sufficiency to Peonage: An Interpretation," *American Historical Review*, 85 (1980), 1103.
 - 27) Claim of Abner Ginn, Beaufort, Southern Claims Commission Records, RG 217, File #10076; Federal Manuscript Census, South Carolina, [Beaufort District], Schedules of Population, Slaves, and Agriculture, 1850 and 1860; Marjorie S. Mendenhall, "A History of Agriculture in South Carolina, 1790-1860: An Economic and Social Study" (Ph.D. dissertation, University of North Carolina, 1940), 57.
 - 28) Manuscript Census, Jackson County, Georgia, Schedule II, 1850; Hahn, *The Roots of Southern Populism*, 26.
 - 29) Mack Swearingen, "Thirty Years of a Mississippi Plantation: Charles Whitmore of 'Montpelier'," *Journal of Southern History*, 1 (1935), 199-211.特に207. コットン・ジンを建設する金銭的余裕のないヨーマンたちが近くのプランテーションに綿花を持って行き、綿繰り作業をやってもらい、代金をプランターに支払うのは綿花地帯のいわば慣習となっていた。例えば第三代大統領トマス・ジェファソン (1743-1826年) は自身のモンティチェロ・プランテーションにおいてコットン・ジンの近隣農民への貸出しを行っていた。Louise Gladney, "History of Pleasant Hill Plantation, 1811-1867," (M.A. Thesis, Louisiana State University, 1932), 5; Weymouth T. Jordan, *High Davis and His Alabama Plantation* (1948), 134; James A. Bear, Jr. and Lucia C. Stanton, eds., *Jefferson's Memorandum Books: Accounts, with Legal Records and Miscellany, 1767-1826* (Princeton, 1997), 42. また31, 907頁も参照。ジェファソンの小麦、トウモロコシ製粉機の導入および近隣住民への貢献に関しては、*Ibid.*, 1198, 1352; James A. Bear, Jr., ed., *Jefferson at Monticello: Recollections of a Monticello Slave and of a Monticello Overseer* (Charlottesville, 1967), 64; Everett E. Edwards, *Jefferson and Agriculture* (New York, 1976), 21.
 - 30) Swearingen, "Thirty Years of a Mississippi Plantation," 209-210.
 - 31) 注27) 参照。ヴァージニアのピードモント地方の奴隷経済活動について研究したジョン・シュロターベックは、奴隷主たちが剰余奴隷を頻繁に近隣農民に賃貸した (hired out) ことを明らかにした。John T. Schlotterbeck, "The Internal Economy of Slavery in Rural Piedmont Virginia," in *The Slaves' Economy: Independent Production by Slaves in the Americas*, edited by Ira Berlin and Philip D. Morgan (London, 1991), 171-172.
 - 32) Uriah Bennett interview, "Scuppernong Farms Project, Washington and Tyrrell Counties," vol. 1, chapter 8, the Resettlement Administration, U. S. Department of Agriculture, comp., in the Farm Security Administration Papers, 2 vols., North Carolina Division of Archives and History, Raleigh.
 - 33) Frederick Fitzgerald to Samuel Farmer Jarvis, January 3, 1844, Miscellaneous Papers, Southern Historical Collection, University of North Carolina Library, Chapel Hill; Wayne K. Durrill, *War of Another Kind: A Southern Community in the Great Rebellion* (New York and Oxford, 1990), 13-15.
 - 34) Sam B. Hilliard, *Hog Meat and Hoecake: Food Supply in the Old South, 1840-1860* (Carbondale, 1972), 191.
 - 35) Olmsted, *The Cotton Kingdom*, vol. 2, 79; John S. Bassett, *The Southern Plantation Overseer as Revealed in His Letters* (1925); 59, 107; Swearingen, "Thirty Years of a Mississippi Plantation," 209; Bear, *Jefferson at Monticello*, 80-84. プランターは自己所有奴隷に対しては樹木の伐採、薪の備蓄作業と引き換えに燃料材を供与した。これはプランテーション奴隷労働の年間スケジュールの中に組み込まれていた。拙論「集団/共同奴隷耕作地—その実態及び歴史的役割—」『新潟産業大学経済学部紀要』36 (2009年), 125-126頁。
 - 36) 例えばGray, *History of Agriculture in the Southern United States*, vol. 1, 486.
 - 37) William Kauffman Scarborough, *The Overseer: Plantation Management in the Old South* (Athens, 1966), xxi, 41-43. 第3章も参照。Eugene D. Genovese, *Roll, Jordan, Roll: The World the Slaves Made* (New York, 1974), 13; Bennett H. Wall, "Ebenezer Pettigrew,

- an Economic Study of an Ante-Bellum Planter,” (Ph. D. dissertation, University of North Carolina at Chapel Hill, 1946), 181, 193, 194, 197, 210; Ebenezer Pettigrew to John Heritage Bryan, February 5, 1831, Pettigrew Family Manuscripts, University of North Carolina Southern Collection, Chapel Hill.
- 38) John Berkley Grimball Diaries, 1832-1883 #970, Southern Historical Collection, Wilson Library, University of North Carolina at Chapel Hill, vol. 2, 55; vol. 1, 77 (typescript); Bennett Wall, “Ebenezer Pettigrew, an Economic Study,” 199-202, 203, 210, 213-214, 217-218.
- 39) 「奴隷耕作地」の概念及び従来の研究者たちの捉え方に関しては、Tutomu Numaoka, “The Negro Patch Revisited: Another Look at Its Structure and Function in the Antebellum South,” *Bulletin of Niigata Sangyo University* 16 (1996), 45.
- 40) 拙論「アンティベラム南部奴隷制下における『奴隷耕作地』再考(1)」『新潟産業大学経済学部紀要』19 (1998年), 75-81頁。
- 41) 同上 71-73頁。
- 42) Joseph Holt Ingraham, *The South-West. By a Yankee*, vol. 2 (New York, 1835), 54-55.
- 43) Account Book with the Negroes (1817-1823 and 1824-1830) (P.C. 13.20), Pettigrew Papers, North Carolina Division of Archives and History, Raleigh; Slave Accounts, 1831-1837, Folder 482, in the Pettigrew Family Papers #592, Southern Historical Collection, Wilson Library, University of North Carolina at Chapel Hill.
- 44) “On the Conduct and Management of Overseers, Drivers and Slaves,” *Southern Agriculturist*, 9 (1836), 230.
- 45) Hundley, *Social Relations in Our Southern States*, 226-232.
- 46) Hahn, *The Roots of Southern Populism*, 30-31; Hundley, *Social Relations in Our Southern States*, 226-232; Alex Lichtenstein, “That Disposition to Theft, with Which They Have Been Branded: Moral Economy, Slave Management, and the Law,” *Journal of Social History*, 22 (1988), 425-427; Olmsted, *A Journey in the Seaboard Slave States*, 84-85, 422-423; Genovese, *Roll, Jordan, Roll*, 23-24; 641-643.
- 47) Shlotterbeck, “The Internal Economy of Slavery,” 173-174, 176-177.
- 48) Owsley, *Plain Folk*, 8.
- 49) Bennett H. Wall, “Ebenezer Pettigrew, an Economic Study,” 199.
- 50) Steven Sarson, “Yeoman Farmers in a Planters’ Republic: Socioeconomic Conditions and Relations in Early National Prince George’s County, Maryland,” *Journal of the Early Republic*, 29 (2009), 94-95.
- 51) Margaret L. Callcott, ed., *Mistress of Riverside: The Plantation Letters of Rosalie Stier Calbert 1795-1821* (Baltimore, 1991), 191-192 (傍点引用者).
- 52) Sarson, “Yeoman Farmers in a Planters’ Republic,” 96-99.